

国語科の主張

1 教科で育みたい人間像

言葉には世界を変える力がある。友達の一言に勇気をもったり、文章を読んで涙を流したり、自分の言葉が誰かの心の支えになったりすることもある。さらには、昔から語り継がれる文章や言葉が、時代を超えて私たちの胸を打つこともある。人と人がつながるために生まれた言葉には、人の心を動かし、行動さえも変えてしまうような力があるのだ。だからこそ、人は他者とわかり合える言葉に昇華させていきたいと思うのではないだろうか。

現代ではネットワークの進歩によって自分の思いを、より簡単に、より速く、より広く伝播できるようになった。寝る前に何気なく SNS 上に書き込んだ自分の言葉が、朝になって自分の予想をはるかに超えた人たちに影響を与えていることも珍しくない。同じ言葉を投げかけるにしても、これまで以上に自分が発する言葉を見つめ直すことが求められるようになった。自分の思いをありのままに発する前に、誰に・何のために・どの言葉を用いるのかを思い描くことは、他者の心に思いを届け、互いにわかり合えるきっかけとなるだろう。

このように一歩立ち止まって自分の言葉を見つめ直し、自分の思いが伝わるためにはどうしたらいいかを考え、言葉を吟味していくことは、言葉自体の価値に目を向け言葉を大切に思いを表現していると言えるだろう。このような経験を重ねることで、私たちの人生は彩り深いものになっていくのではないだろうか。

以上のことから、子どもたちには「言葉を大切に、自らの思いを表現していく人」に成長してほしいと願っている。

2 教科で願う子どもの学び

私たち国語科が願う子どもの学びとは、「題材に描かれた価値や人々の生き方、考え方に対して自分なりの考えをもつことや、それを他者と交流することで自らの考えを深め、言語感覚を磨くこと」である。

例えば、小説を読む際には、情景描写や人物描写、象徴表現や比喩表現、語り手の視点や対比、段落構成といった技法を活用して読み深めていく。さらに、それらを結びつけることによって作品の主題にせまったり、作品においてその言葉が意味することをとらえたりしていく。その過程で子どもたちは他者の言葉を適切に受けとるために、用いられている言葉の意味を考えたり、多くの情報を様々な視点からとらえ直したりしていくこともある。

また、自分の考えを発信するときには、自分の思いや考えをより正しく他者に伝えるために、相手意識をもった上で言葉を用いようとする。さらには、言葉にふれて抱いた思いを他者と伝え合うことで、自分の考えを深め、価値観を広げていくこともある。

このように言葉を吟味している子どもの姿は、言語感覚を磨いている姿だと言えるだろう。

そのために、私たちは作品や教材と子どもたちをつなぎ、言葉の世界に没頭できるような題材構想を大切にしている。題材の魅力にふれた子どもたちは、自らの疑問から問いを生み出し、その問いの解決に向けて追求にのめり込んでいく。そして、その問いを解決する過程で見いだしたことや、新たに抱いた疑問などを他者にも伝えたい。他者に伝える際には、自分の根拠としたことや、説明するために有効な非言語情報（図やグラフ、動画などの参考資料など）を活用して説明をしたり、言語情報だけで自分の意図することを相手に届けるために言葉選びにこだわったりする。

このように子どもたちは自らの思いを相手に届けるために、言葉にこだわり続ける学びを重ねることで、言語感覚を涵養していくのである。

私たち国語科は、子どもたちが言葉の世界に浸る営みを繰り返すことで、思いや考えを他者とわかり合えることの喜びを味わいながら、豊かな言語感覚を磨いていくことを願っている。